

デジタルオーラル | 複雑心奇形

デジタルオーラル I (OR7)

複雑心奇形 2

指定討論者:大月 審一 (岡山大学病院 小児循環器科)

指定討論者:富田 英 (昭和大学病院)

[OR7-1]無介入で経過した修正大血管転位症の中長期予後

○土井 悠司¹, 上田 和利¹, 荻野 佳代¹, 林 知宏¹, 小坂田 皓平², 大家 理伸², 福 康志², 脇 研自¹, 新垣 義夫¹ (1.倉敷中央病院 小児科, 2.倉敷中央病院 循環器内科)

キーワード: 修正大血管転位症, 成人先天性心疾患, 長期予後

【背景】修正大血管転位症(CCTGA)の治療方針は症例ごとに大きく異なり、二心室循環でも近年は anatomical repairが積極的に行われるようになってきている。一方で、成人期に初めて診断される症例も一定数あり、長期予後に関しては不明な点が多い。【目的】CCTGA症例のうち、無治療で経過している症例の中長期予後を検討する。【方法】当院で診療歴がある CCTGA症例のうち、無介入かつ中期的な経過を追跡可能な15歳以上の8例を対象とした。解剖学的右室の FAC, 三尖弁逆流(TR), NYHA, BNP, CTR, AVBの経年変化を評価した。TRは trivial=0.5, mild=1, moderate=2, severe=3でスコア化して評価。【結果】SLLが6例(75%)、合併奇形を伴う症例は4例(50%)。最終経過観察時の年齢は26.6歳(15.8~64.6歳)、観察期間は6.8年(3.0~7.7年)。5例(63%)に ACEI阻害剤、利尿剤、β遮断薬などの内服治療あり。FACは33.5%(24.0~38.6%)から32.9%(22.0~36.3%)と軽度悪化(p=0.01)、TRも悪化傾向を認めた(p=0.049)。NYHAは全例観察期間で中変化はなく、BNPや CTRも有意な変化を認めなかった。AVBは3例で進行、うち1例は RFCAによる CAVBで PMIとなっている。【考察】無介入で経過していた症例は肺動脈弁狭窄(PS)や大血管の転位がなく、三尖弁機能が良好な症例であった。右室機能および TRは経時的に軽微な悪化を認めたが、内科治療を駆使することで安定して経過しており積極的な治療介入には議論の余地があると思われる。【結語】PSがなく三尖弁機能にも懸念が無い症例は比較的安定して経過する可能性もあり、anatomical repairを積極的に目指すべきかに関しては議論の余地がある。